

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

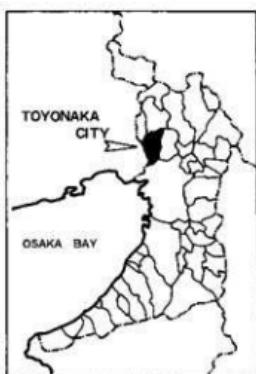
1988年度

1989年3月

豊中市教育委員会

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

1988年度



1989年3月

豊中市教育委員会

序 文

豊中市は、大阪府の西北部に位置し、緑なす千里丘陵と猪名川によって育まれた沃野に広がり、恵まれた自然と生活を地として栄えてまいりました。また、近年は大阪のベッドタウンとして、そして交通網の要所として大きな変貌をとげるに至りました。

この報告書は、昭和63年度事業として国ならびに大阪府の補助を受け、豊中市教育委員会が実施した、小石塚古墳群接地と本町遺跡の調査に関するものであります。各遺跡の調査については、以下にその内容を報告しておりますが、小石塚古墳は国指定史跡桜塚古墳群として指定を受け、古墳時代前期末の前方後円墳として豊中を代表する古墳のひとつであります。また本町遺跡は近接している新免遺跡とあわせて、近年の調査により弥生時代から古墳時代を中心とした、市内でも有数な集落遺跡であることが明らかになってきております。

調査の実施にあたっては、諸先生方にご指導を賜り、また土地所有者・近隣の方々には文化財の重要性をご理解いただき多大なご協力を賜りました。また、文化庁、大阪府教育委員会ならびに関係機関には、格別のご指導とご配慮をいただきました。このような各方面の方々のお力添えにより、豊中の文化財保護行政が一層推進できることに対し、皆様方に厚くお礼申し上げます。

今後とも開発の進む豊中においては、このような調査により様々な形で古代豊中の姿が明らかにされていくものと思われます。現代に生きる私達は、先人の足跡に思いを寄せるとともに、文化遺産として後世に伝えていく責務についてあらためて考えたいものであります。

平成元年 3月31日

豊中市教育委員会

教育長 青木伊織

例　　言

1. 本書は豊中市教育委員会が昭和63年度国庫補助事業(総額3,000,000円、国庫50%、府費25%)として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査概要報告書である。
2. 本年度の調査は、小石塚古墳(隣接地)、本町遺跡について実施した。平成元年2月15日～平成元年3月31日までの間、発掘調査ならびに整理作業を行なった。
3. 発掘調査は本市教育委員会社会教育部社会教育課文化係が実施した。詳細は下表のごとくである。
4. 本書の執筆・編集は、それぞれの担当者が行なった。
5. 各調査地の土地所有者、施工業者、ならびに近隣の住民の方々には、文化財保護に対して深く御理解いただいた事について、深く感謝いたします。

遺　跡　名	調　　査　地	調査面積	担当者	調　　査　期　間
小石塚古墳　3次	豊中市岡町北1-36-2	280m ²	墨部聰志	平成元年2月15日～3月31日
本町遺跡　12次	豊中市本町3-286	296m ²	鶴本照男	平成元年3月1日～継続中

目 次

第I章 位置と環境 1

第II章 小石塚古墳第3次調査の概要

1 調査の経緯	3
2 調査の概要	3
3まとめ	8

第III章 本町遺跡第12次調査の概要

1 調査の経緯	9
2 地区設定と基本層序	10
3 遺構の概要	10

図版目次

図版 1 小石塚古墳第3次調査地点	(1)周溝検出状況(東から) (2)周溝全景(北から)
図版 2 小石塚古墳第3次調査地点	(1)SD-01・SX-03検出状況(西から) (2)SD-01埴輪出土状況
図版 3 小石塚古墳第3次調査地点	(1)SX-03検出状況(北から) (2)SX-03検出状況(西から)
図版 4 小石塚古墳第3次調査地点	(1)SX-03細部(北から) (2)SX-03検出状況(南から)
図版 5 本町遺跡第12次調査地点	(1)遺構検出状況(西から) (2)遺構検出状況(北側)
図版 6 本町遺跡第12次調査地点	(1)遺構検出状況(南側) (2)SB-01検出状況(東から)

図版 7 本町遺跡第12次調査地点 (1) SB-01検出状況（北から）
(2) SB-01検出状況（南から）

図版 8 本町遺跡第12次調査地点 (1) SB-01細部（SP-03）
(2) 遺物出土状態（SP-24）

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図.....	2
第2図 調査地点位置図.....	3
第3図 調査区平面図・周溝断面図.....	4
第4図 SD-01平面・断面図	5
第5図 SX-03平面・断面図	6
第6図 小石塚古墳全体図.....	7
第7図 調査地点位置図.....	9
第8図 調査範囲図.....	10
第9図 層序断面写真.....	10
第10図 遺構検出平面図.....	11
第11図 SB-01（推定）平面・断面図	12
第12図 SB-02平面・断面図	12

第Ⅰ章 位置と環境

位置 豊中市は大阪の北部に位置し、行政区分は北摂地方にくみこまれている。しかしながら地形を考慮するならば、標高130mを頂点とする島熊山を中心に広がった千里山丘陵の西部に位置することから、西摂地域にくみするものである。豊中市を地形的にみると、北東部に広がる千里山丘陵、その南西に形成された段丘の豊中台地、その西と南に開けた沖積平野と変化に富む地形を有する。今回の発掘調査を実施した本町遺跡、小石塚古墳とも、豊中台地の段丘に立地する遺跡である。

歴史的環境 豊中市の遺跡は国府型ナイフ形石器を出土する旧石器時代に始まる。これらの遺跡は、千里川沿いにみられる低位段丘や中位段丘に所在する遺跡である。

縄文時代の遺跡の多くは猪名川の支流、千里川の河岸段丘に位置し、早期から晩期にかけて、点在していることがうかがえる。その中でも、野畑春日町遺跡や野畑遺跡など中期から晩期を中心をおく遺跡が主流である。しかし、沖積地においても、空港A地点遺跡、原田西遺跡、穂積遺跡などで中期の土器の単独出土がみとめられ、気になるところである。

弥生時代になると、猪名川流域や豊中台地の縁辺部を中心に遺跡が急増する。勝部遺跡や尼崎市田能遺跡は前期の代表的な集落であり、螢池北（宮ノ前）遺跡や新免遺跡は台地縁辺部に存在した中期の大規模な集落と思われる。また、利倉西遺跡、上津島遺跡、穂積遺跡、庄内遺跡など後期の著名な遺跡が平野部に多数分布している。

古墳時代は、弥生時代から継続する集落がほとんどであり、千里川沿いに分布する柴原遺跡、本町遺跡、新免遺跡などは、桜井谷の支谷を利用した須恵器生産に伴う桜井谷窯跡群と密接な関係を持っていた事がうかがえる。一方、古墳は待兼山古墳・御神山古墳が前期古墳として千里丘陵の縁辺部を利用して築造されている。中期には大石塚・小石塚古墳を含む桜塚古墳群が台地上に形成されている。桜塚古墳群は明治の絵図によると純数36基を数えるが、現存するのは東部の大塚古墳・御獅子塚古墳・南天平塚古墳・西部の大石塚古墳・小石塚古墳の5基を数えるにすぎない。後期古墳としては、太鼓塚古墳群・新免宮山古墳群が知られている。また最近の調査で、新免遺跡、利倉南遺跡、穂積遺跡からも古墳の周濠が検出されており、古墳の分布の再検討が必要である。

7世紀以後には、古代寺院として飛鳥時代末の建立と考えられる金寺山廃寺が存在する。奈良時代には豊中市域も攝津国豊島郡として律令制下に入り、柴原遺跡、上津島南遺跡、島田遺跡、本町遺跡などから掘立柱建物跡が検出されている。



- | | | | | | |
|------------|-------------|------------|------------|-------------|--------------|
| 1. 銀池北遺跡 | 10. 郡神山古墳 | 20. 桜塚古墳群 | 30. 猿若山遺跡 | 40. 坂山遺跡 | 50. 上津島遺跡 |
| (津田市宮ノ前遺跡) | 11. 南刀根山遺跡 | 21. 四町北遺跡 | 31. 猿若東遺跡 | 41. 里部遺跡 | 51. 上津島南遺跡 |
| 2. 待曾山遺跡 | 12. 萬繪遺跡 | 22. 小石原古墳 | 32. 津田城跡 | 42. 若竹町遺跡 | 52. 滝部西遺跡 |
| 3. 内田遺跡 | 13. 風野町遺跡 | 23. 大石原古墳 | 33. 津田遺跡 | 43. 寺内遺跡 | 53. 櫛觸ポンブ場遺跡 |
| 4. 柴原遺跡 | 14. 金寺山高寺 | 24. 大星古墳 | 34. 曹根西遺跡 | 44. 佐堂の前遺跡 | 54. 飯輪遺跡 |
| 5. 黒池東遺跡 | 15. 新免若山古墳群 | 25. 鶴舞子塚古墳 | 35. 津田西遺跡 | 45. 利倉西遺跡 | 55. 小曾根遺跡 |
| 6. 俊井各高跡群 | 16. 本町遺跡 | 26. 南大坪塚古墳 | 36. 津田中町遺跡 | 46. 利倉北遺跡 | 56. 今西氏庭敷 |
| 7. 上野遺跡 | 17. 新免遺跡 | 27. 良美守遺跡 | 37. 津田云町遺跡 | 47. 利食遺跡 | 57. 北条遺跡 |
| 8. 雷池西遺跡 | 18. 山ノ上遺跡 | 28. 鶴舞古墳 | 38. 曽根南遺跡 | 48. 利食三遺跡 | 58. 島田遺跡 |
| 9. 麻田塙跡群 | 19. 下原窓跡群 | 29. 佐井塙跡 | 39. 曾根北遺跡 | 49. 上津島川底遺跡 | |

第1図 周辺遺跡分布図

第II章 小石塚古墳第3次調査の概要

1. 調査の経緯

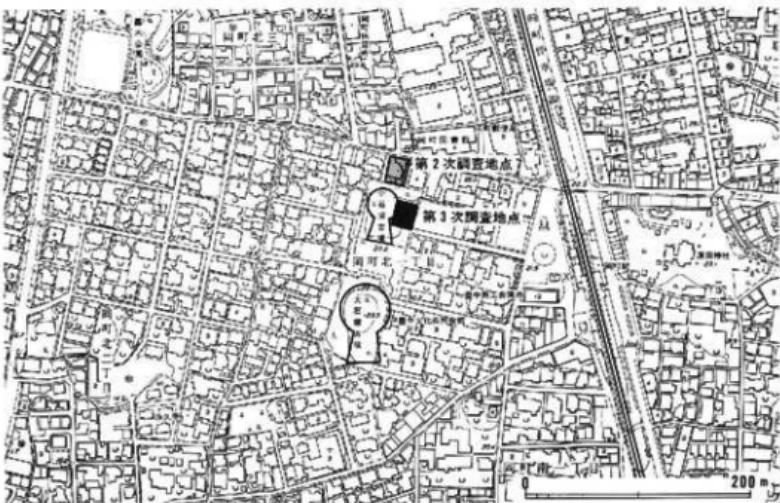
調査地点は、岡町北1丁目36-2に所在する。国史跡小石塚古墳の後円部墳丘ならびに周溝の一部に相当する部分である。今回、専用住宅の建て替えに伴い、墳丘および周溝の範囲確認を主目的として実施したものである。

調査は周溝推定範囲に留まらず、敷地内掘削可能範囲の全域を対象とすることとした。この点については1987年度に実施した第2次調査において、周溝外に2基の円筒埴輪棺を検出しており、古墳周囲におよそ相当数の埴輪棺の存在が確定されたことによるものである。調査の実施に際しては、排土処理の問題から調査範囲を東西に二分し、東側部分の調査終了後、西側部分に移ることとした。

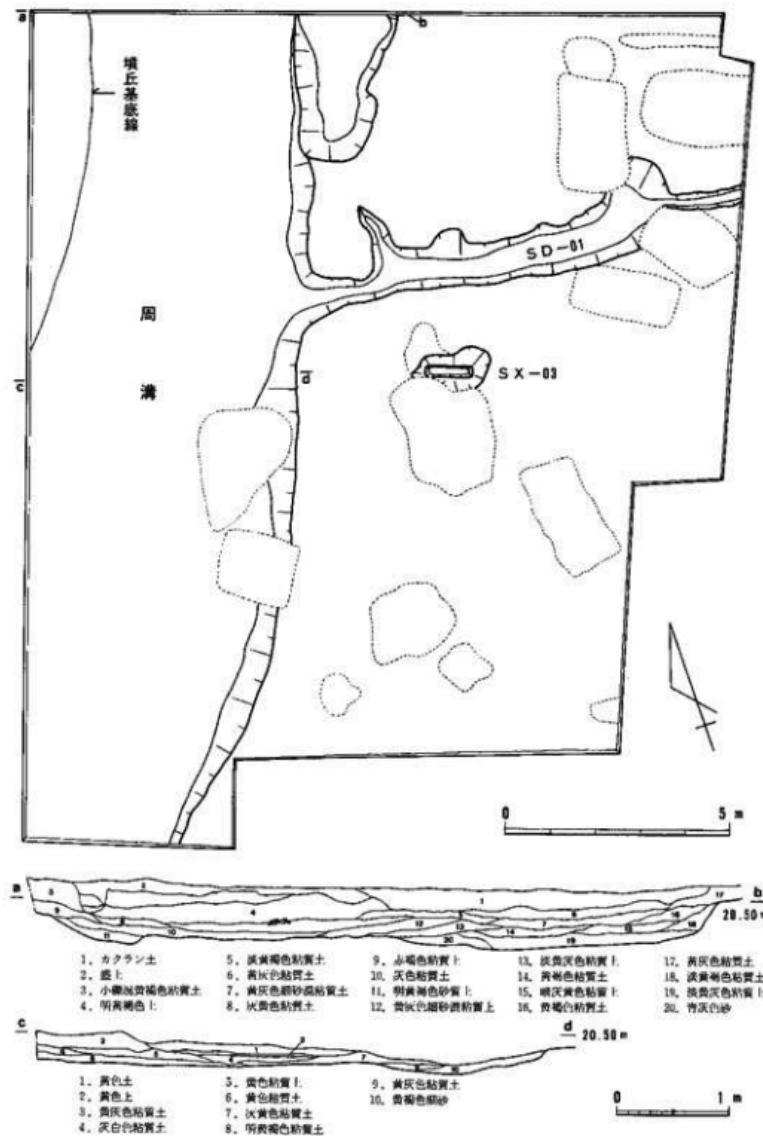
2. 調査の概要

(1) 基本層序

周溝埋土部分を除くと、敷地の大半は上部がすでに既存建物の基礎及び整地作業で搅乱が及



第2図 調査地点位置図



第3図 調査区平面・周溝断面図

んでおり、古墳築造後の純粹な堆積土層は認められなかった。したがって現地表下マイナス0.4mまでは擾乱土で占められ、その下は低位段丘に特有の礫混黄色粘土を主体とする地山層であった。

(2) 検出遺構

調査の結果、後円部墳丘基底部とそれをとりまく周溝、溝1、円筒埴輪棺1をそれぞれ検出した。各遺構について以下に概要を述べる。

周溝（第3・6図） 後円部からくびれ部にかけてめぐる周溝を、長さ約19mの範囲にわたり検出した。周溝の幅は後円部東側で最も狭く5m、くびれ部付近で最も広く、およそ10m前後を測るものと推定される。平面形は、後円部の張り出しを意識するかのようにやや弧状にめぐるもの、その形態は比較的ルーズなもので、必ずしも墳丘の相似形を描くものではない。深さは調査区北寄りと南寄りでやや深く40cm前後、中央部分がそれより浅く20~30cmを測る。

周溝の埋土は、大きく4層程度に分かれる。周溝底部に灰色粘土が約10cmの厚さで堆積したあと、墳丘及び周溝肩部より黄褐色ないし赤褐色粘質土の流入がみられ、その後一気に整地土かともみられる明黄褐色砂質土及び黄褐色粘質土が周溝全面を覆ったものと考えられる。各層位の堆積時期については、最下層が埴輪片の他、若干の須恵器片を含むことから、概ね古墳築造後から7世紀頃にかけて徐々に堆積したものと思われる。ただ層厚が10cm前後と薄く、若干の滞水状態を思わせる土質、色調を呈する点から、相当長い期間に亘り、雨水が常に溜りうるようなオープンな状態に置かれたものと推定される。出土遺物として調査区東北コーナー付近で検出した墳丘基底部に流入した20点前後の埴輪片をあげるとどまるが、本来墳丘上に樹立されていたものにしては量的にやや物足りない。

なお調査区北端付近に周溝と重複する土坑状の落ちを検出したが、埋土の重複関係からみる限り周溝掘削と同時、もしくはそれ以前に掘り込まれたものと考えられる。この落ちからの出



第4図 SD-01 平面・断面図

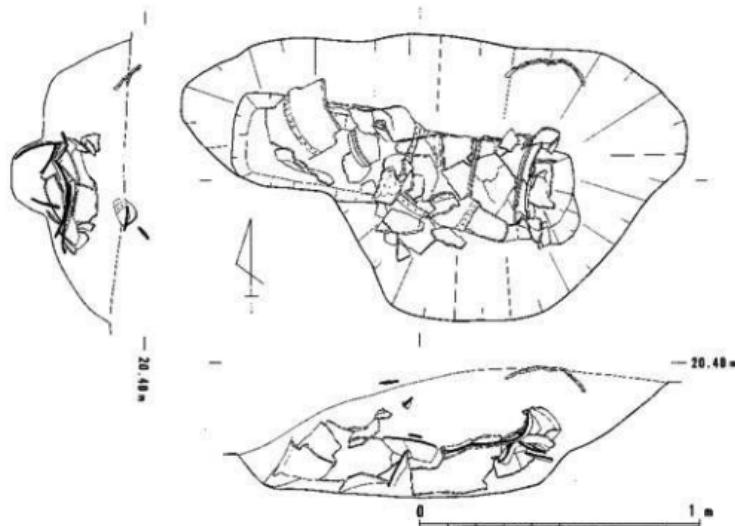
土遺物は皆無。

S D 0 1 (第4図) 周溝と概ね直交するように掘り込まれた溝で、長さ約8.5m、幅0.6~1.4m。深さ15~30cmで周溝に向かって徐々にレベルを下げる。溝の東端部分は幅30cm前後と細くなり、さらに東端に伸びるものと思われる。遺物は数十片の埴輪片が溝の西半部にまとまって出土した。出土位置が南肩付近に片寄りをみせる点から溝の南側より流れ落ちたものと思われる。周溝との明確な切り合は認められなかったが、埋土の堆積状態から、周溝よりも溝の埋没が早かったと推定される。このことと出土遺物が埴輪片に限られる点を考え合わせると、当遺構も古墳築造ときほど時期を隔てず掘削されたものと考えられる。

S X 0 3 (第5図) 調査区の中央付近、S D 0 1 の南側に営まれた円筒埴輪棺で、ほぼ東西方向に主軸を置く。墓壇の長さ1.8m、幅1.0m、深さ0.45mで、中央部をさらに長さ約1.2m、幅0.3mの規模に一段深く掘り下げている。円筒埴輪棺はこの下部掘り込みの中に横たえられたものである。

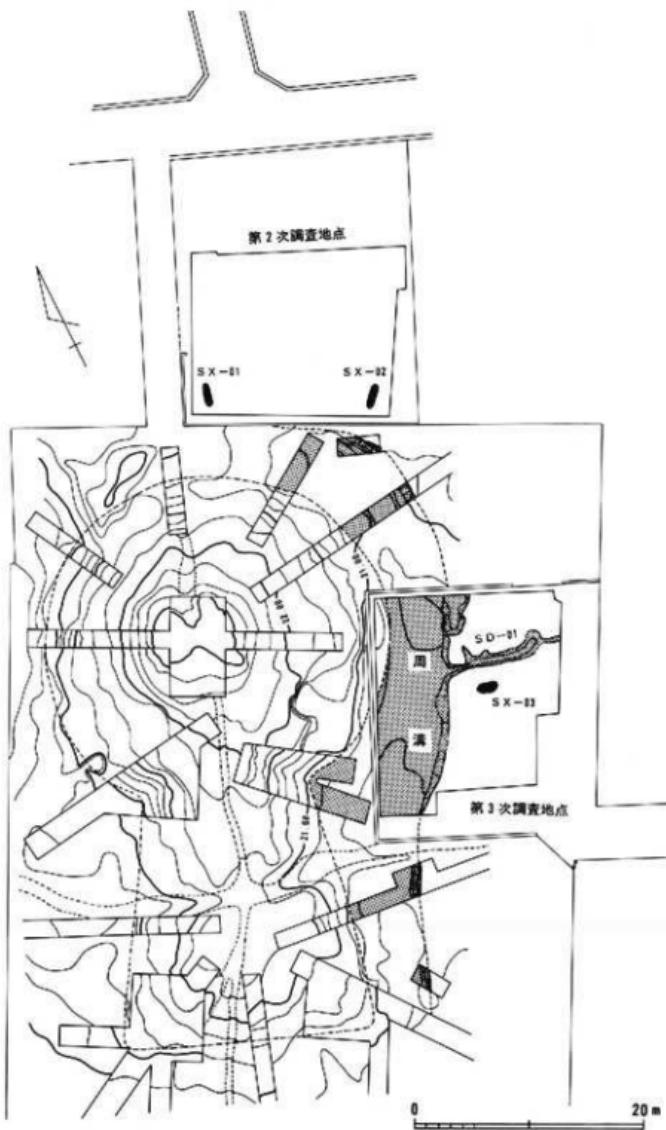
棺に使用された埴輪については、まだ復元作業を行っていないため、形式、大きさ、個体数など詳細については明らかにしがたいが、調査段階での所見にもとづいて可能な限り観察結果を記したい。

基壇下段部分に横たえられた埴輪には、少なくとも2個体以上の円筒埴輪を使用したことが



第5図 SX-03 平面・断面図

2. 調査の概要



第6図 小石塚古墳全体図

認められる。うち東側のものは、復元高約50cm、底径約30cmの小ぶりのもので、3段3突帯に外反する口縁部を有するものである。透孔は逆三角形を呈し、外面は細かいタテハケ、ナナメハケが施され、黒斑を有し、部分的に赤色顔料の塗布を認める。この埴輪はその出土状況から、墓壇下段部分の底部に破片の存在を認めなかった点から、もともと完形品ではなかった可能性が高い。この埴輪と同様の形式、大きさを有するものとして、第2次調査地点のSX01に使用された埴輪1、2をあげることができる。一方、西側の埴輪は、円筒埴輪の口縁部、底部、胴部の各破片が一定の方向性をもたずに出土しており、1個もしくは複数個体の円筒埴輪の破片で遺体を被覆したものであろう。なお西側の埴輪は、口縁部の形態、底部径、器厚などから、東側のものとは異った形式のものと考えられる。

3.まとめ

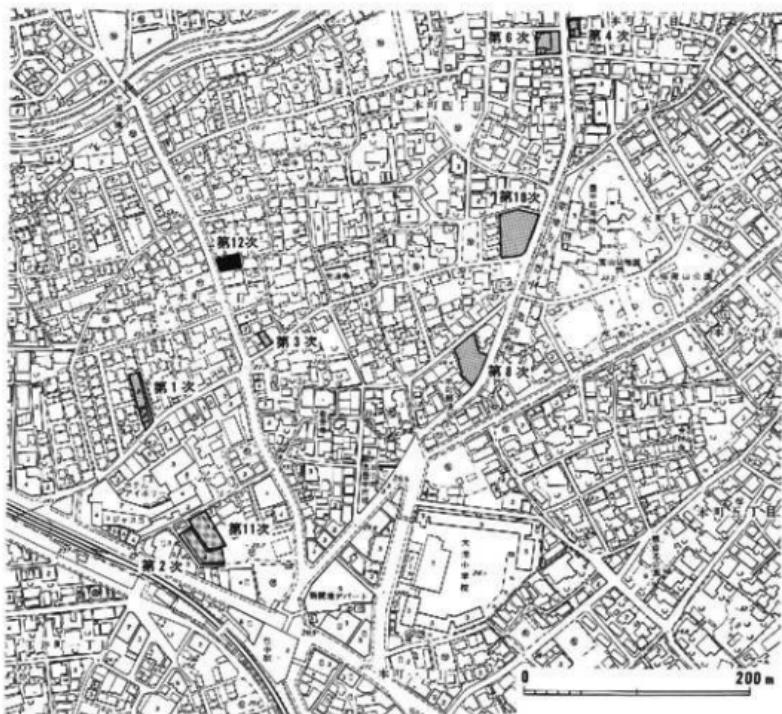
今回の調査では、当初からの予想通りとはいえ、後円部墳丘基底部、並びにそれをとりまく周溝を比較的良好な保存状態のもと検出することができた。このうち、とくに周溝については、その平面形が必ずしも墳丘の形態と相似形を示さず、後円部の輪隔に沿って若干外側に膨らみをもつ程度のルーズな形態を有することが興味深い点としてあげられる。これについては、深さ25~40cmという極めて浅い形状のものであることを合わせ、この周溝が、おそらく地形的により高い墳丘東側を掘り割ることにより、西側とのレベル差を少なくして墳丘の基底ラインを明確にすると同時に、墳丘盛土を供給する目的で掘り込まれたものであることを示唆するものと考えられる。

また周溝の外側に営まれた1基の円筒埴輪棺は、第2次調査地点で検出された2基と同様、小石塚古墳から放射状に主軸を置き、明らかに主墳を意識した配置状況をとるものである。これら円筒埴輪棺の被葬者は、その在り方から、小石塚古墳の被葬者と密接な関係を有したものと考えられるが、今回検出したSX03はその規模から成人埋葬の可能性が低いなど、個々に性格を異にし、被葬者集団の性格についても今後より詳細な検討に俟つこととした。

第III章 本町遺跡第12次調査の概要

1. 調査の経緯

調査地点は、豊中市本町3丁目13-8に所在し本町遺跡の中央部に位置する。今回、個人居宅と共有する共同住宅建設設計画書が提出されたため、事前の立会調査を実行したところ2ヶ所の試掘穴より、包含層、ならびに遺構を検出した。その結果、建物範囲全域に広がっていることが確認されたので共同住宅建設に先だって急遽3月1日より調査を実施し、現在継続中である。したがって報告する部分も東側の約50m²の区域であることとことわっておく。



第7図 調査地点位置図

2. 地区設定と基本層序

調査区の設定は磁北を中心軸に5m方眼に区割りし、南西軸を東から西へアルファベットで、東西軸を北から南へアラビア数字で表示し、呼称は東北杭を基点としてA-1・2・3と命名した。

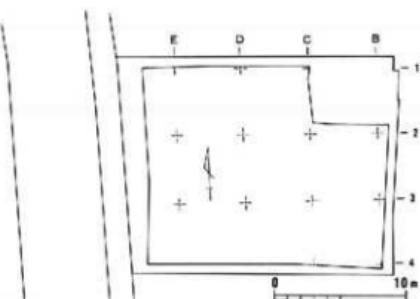
さて、基本層序ならびに調査手順についても簡単にふれておく。上部より盛土、第1層(旧表土)、第2層(暗茶褐色砂質粘土)、第3層(包含層)となり、第2層まで約0.7mを重機により掘削し約30cmを手作業により削除した。

3. 遺構の概要

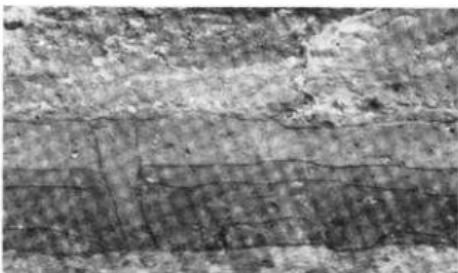
包含層は古墳時代から歴史時代に至る遺物を含んでいるが、その中で明確な遺構面は検出できなかった。調査は現在継続中であるが、判明した溝状遺構、掘立柱建物跡について概述しておく。

SD-01 B-3地区において検出した溝で、北西から南東方向に流れをもつものとみられる。C-3杭付近では搅乱で破壊されているので明確にはできないが、その付近で始まる流路の可能性が高い。東壁の断面を参考にすると、幅約1m、深さ約0.2mのもので、溝内より出土する須恵器の杯身の形態から6世紀前半代の遺構とみられる。

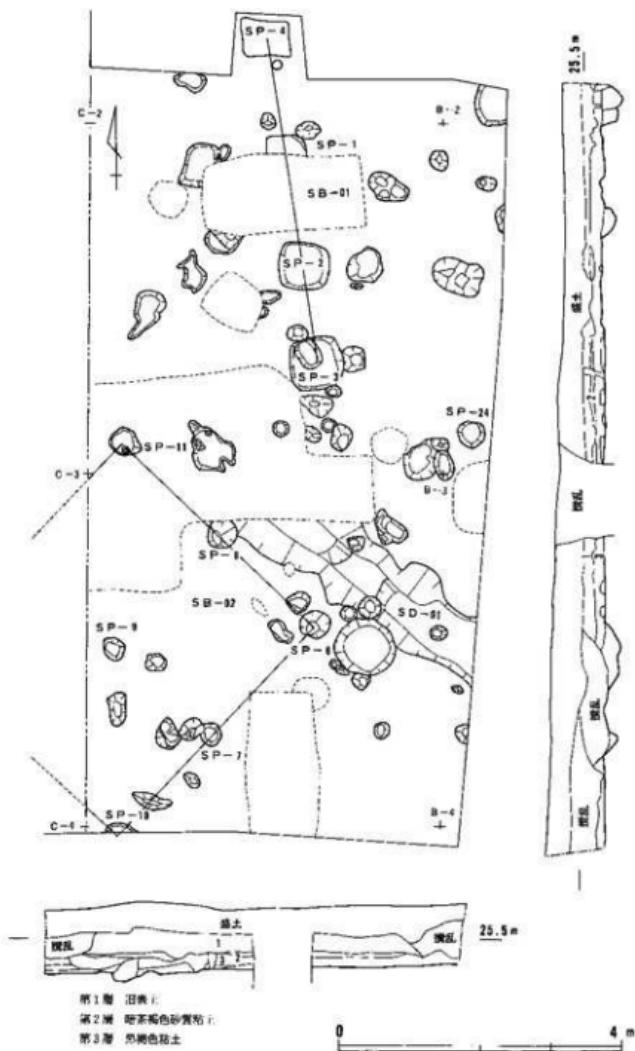
SB-01 B-2とC-2地区のほぼ中央で南北方向に検出された方形の掘りかたをもつもので、掘立柱建物跡と推定している。SP-1～SP-3までを検出したのち確認のためSP-4の部分を抜取したが、それ以北は仮設事務所のため、確認できなかった。したがって現状では東側に延びるものか西側に延びるものかはっきりしないが、西側の部分の調査を進めている状況では検出できていないので、おそらくは東側に関係してくるものと推定される。柱穴の掘りかたは一辺約65cmのやや大形のもので、上部がすでに削平されているとみられるが深さは約20cm残存している。柱の直径はSP-2の痕跡からみれば約20cmである。さてこの建物の



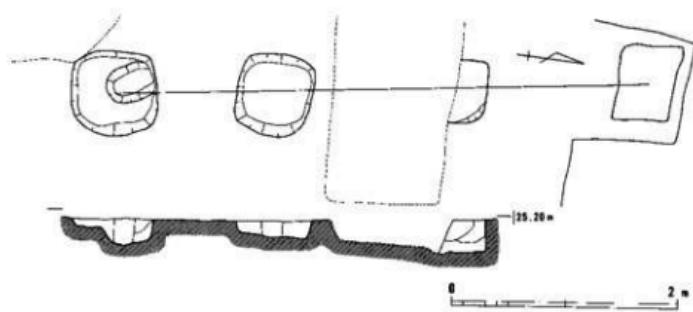
第8図 調査範囲図



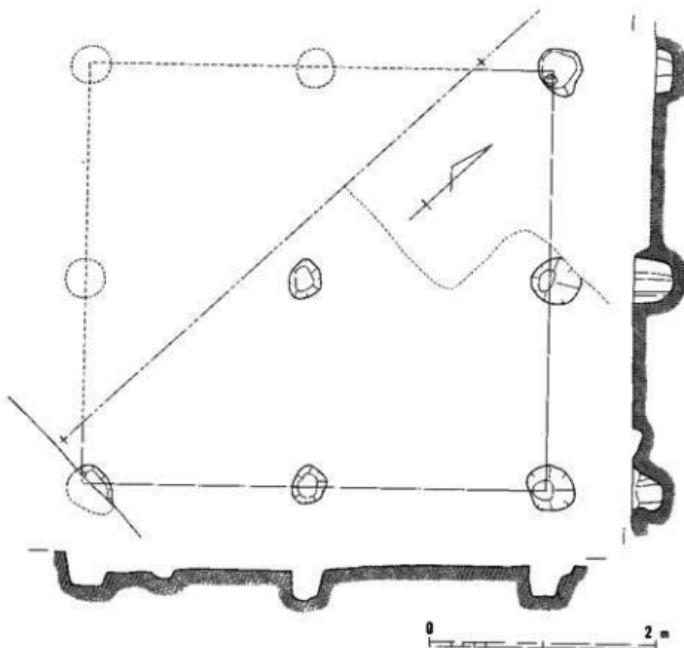
第9図 層序断面写真



第10図 遺構検出平面図



第11図 SB-01 平面・断面図



第12図 SB-02 平面・断面図

時期であるが、現在の調査段階では明確にできる資料が少なく、同じような建物が西側にも広がっていることから今後の状況に委ねなくてはならないが、7世紀代の可能性が高い。

S B - 0 2 南側で検出した掘立柱建物跡である。西側の調査地に延びるもので、2間×2間に続柱になることが推定される。中軸はN-46°-Wとなる。柱間の中心距離は北東から南西方向が約2.1mで北西から南東が約1.9mである。柱穴は円形で直徑約30~40cm、深さは現存で約30cm、柱の直径15cmである。時期は6世紀代と推定される。

出土遺物としては上記の他、弥生土器片、埴輪片、鉄斧とみられるものが若干あるが、これは分析の結果をみなければ明確にできないので今後に委ねておく。

図 版



(1) 周溝検出状況（東から）



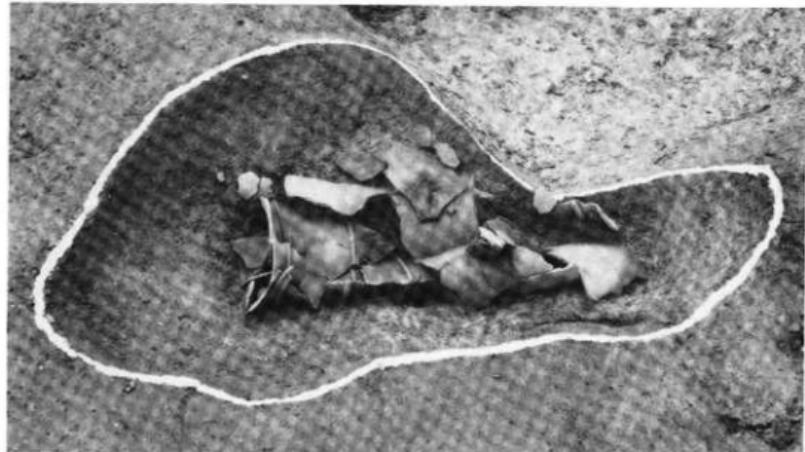
(2) 周溝全景（北から）



(1) SD-01・SX-03 検出状況（西から）



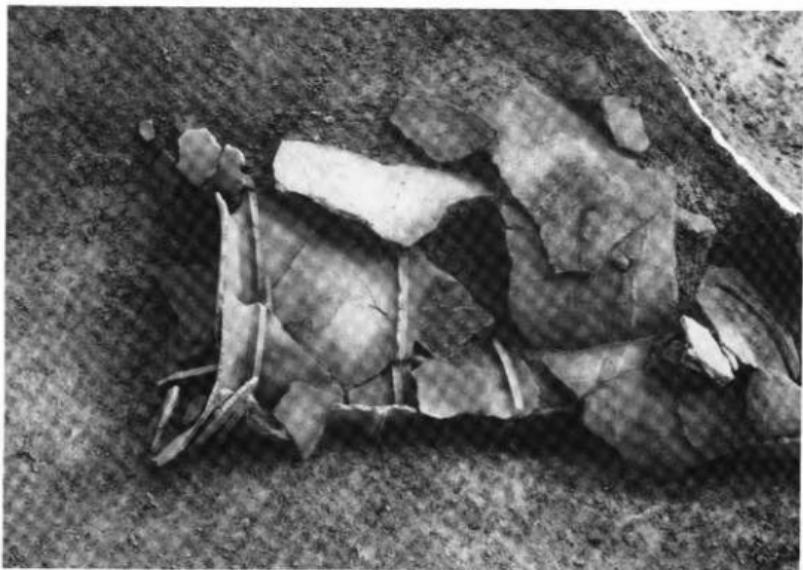
(2) SD-01 墓室出土状況



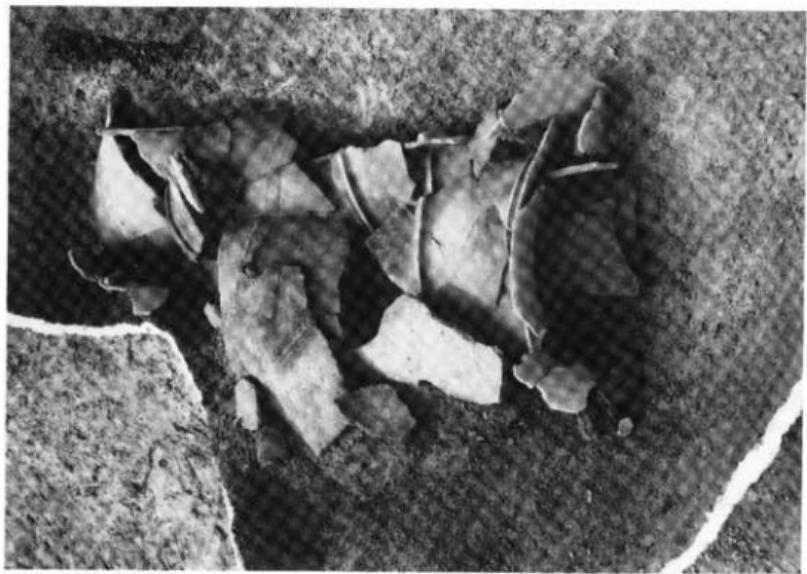
(1) SX-03 検出状況（北から）



(2) SX-03 検出状況（西から）



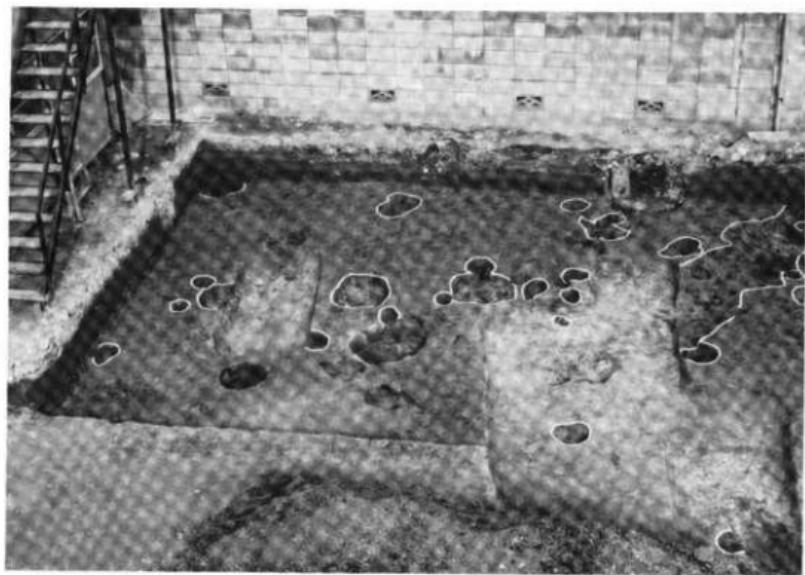
(1) SX-03 細部（北から）



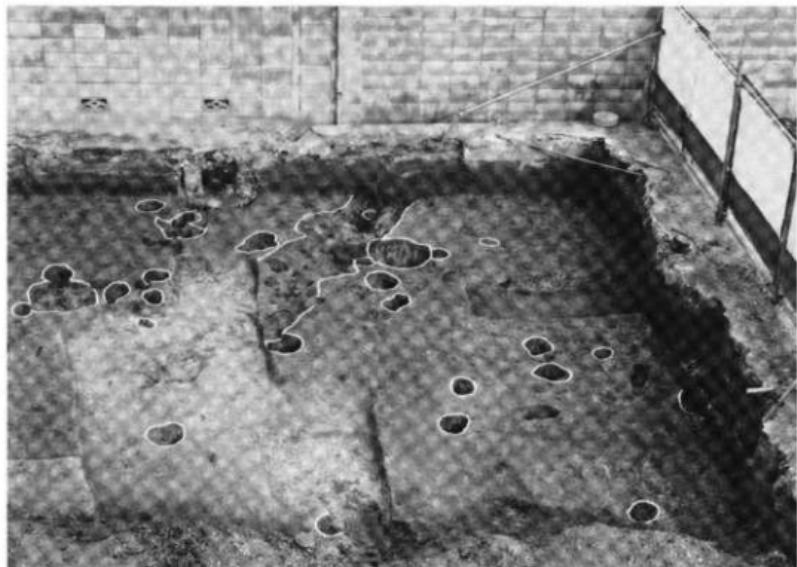
(2) SX-03 検出状況（南から）



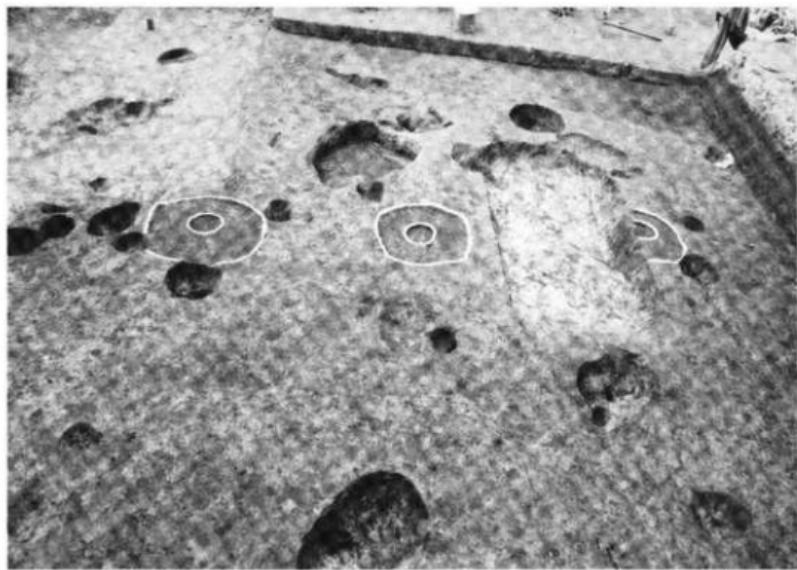
(1) 遺構検出状況（西から）



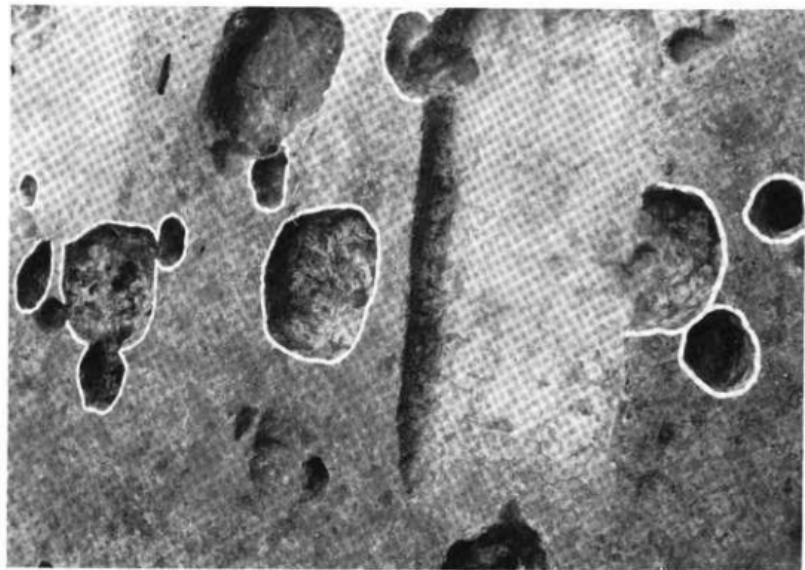
(2) 遺構検出状況（北側）



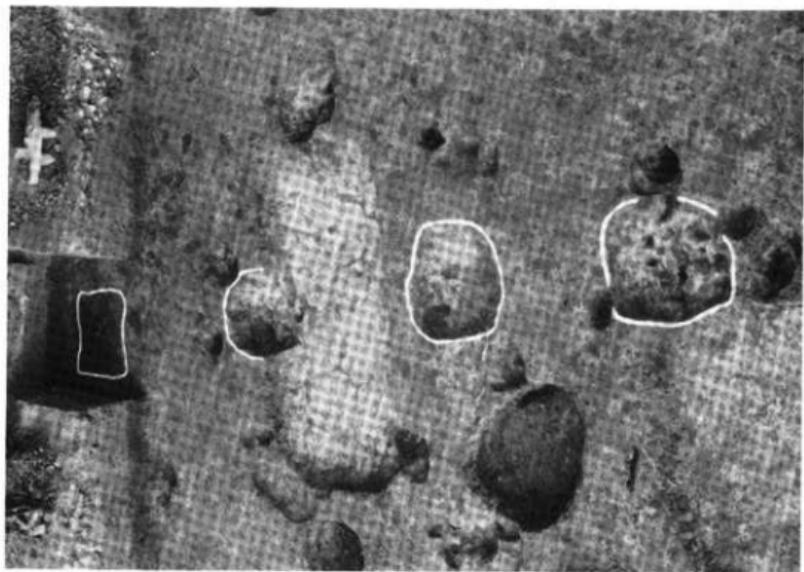
(1) 遺構検出状況（南側）



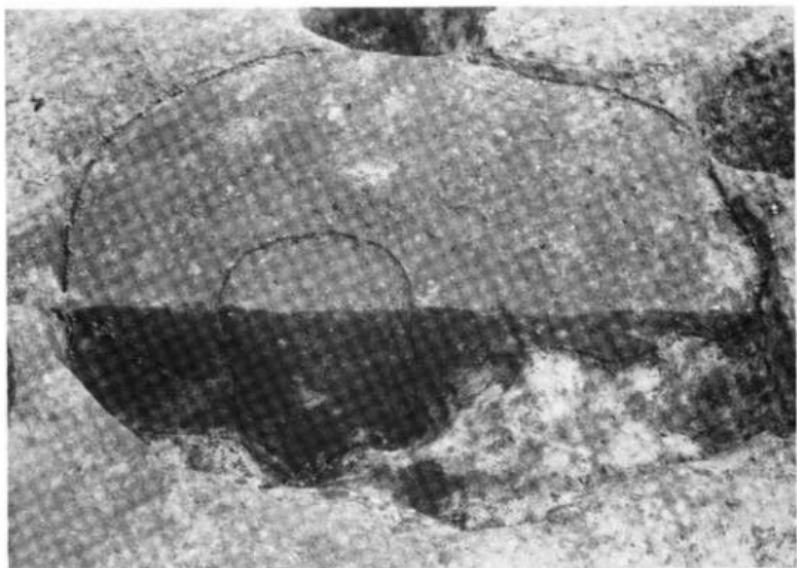
(2) SB-01 検出状況（東から）



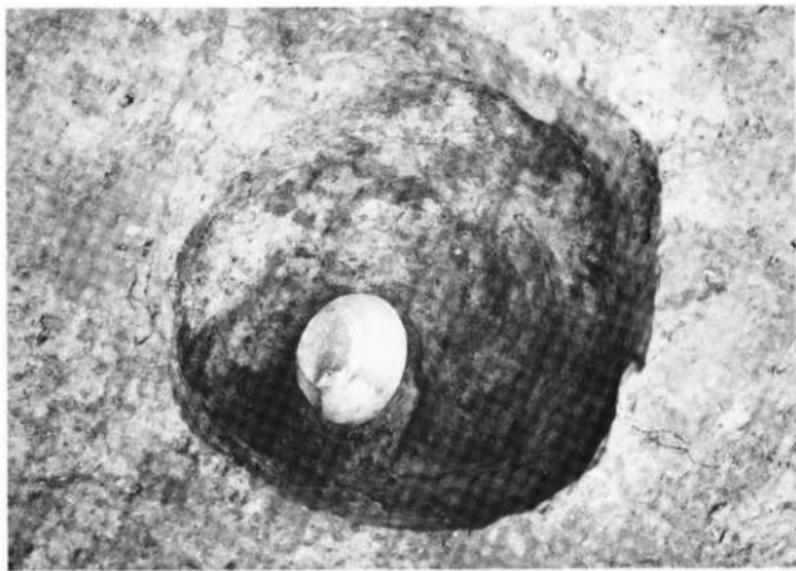
(1) SB-01 検出状況 (北から)



(2) SB-01 検出状況 (南から)



(1) SB-01 細部 (SP-03)



(2) 遺物出土状態 (SP-24)

豊中市文化財調査報告第27集
豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

1989年3月

発行 豊中市教育委員会
編集 社会教育課文化係
印刷 やまかつ株式会社